

幼 児 保 育 と 小 學 教 育

東京女高師附屬小學校 淺 黄 俊 次 郎

は し が き

み空の虹を見る時に われの心はおどるなり

生れし初しかありき 成人し今日もなほ然り

老いての後もしかあらん さらずば生きて何かせん

子供は成人の父なれや われこそ願へわが世をば

おのづからなるつよしみに 日ごとくを結びてん

大詩人ワーズワースのこの有名な短詩「虹」は、教育者として、又親としての私の愛誦禁じ得ないものです。幼な子が奇しき心もて虹を見て躍り喜ぶさまが、如何にも生命の根元であることを暗示して、子供心を最もよく謳つてゐます。

いつはりの世もまだしらぬ幼子は

心やきよきかぎりなるらん

兒童の禮讚、これに増すものがまたとありませうか。教育者ならざる 明治大帝と彼の詩人こそは、眞の大教育者でなくて何でありませう。私はこの大帝の一句の中に、又かの詩人の短句の中に、貴い／＼重大な意味を見出したのです。

この心こそは誠に我々が幼児、兒童に接して常に持合せたい心なのであります。

私は幼稚園保育の實際については、殆んど語るべき何程のことも持ち合せていません。しかし、小學校教育特に幼稚園と關係深い小學校の低學年教育の體驗から見ていさゝか幼稚園の保育について希望を持ち、又幼稚園保育の延長としての小學校低學年の教育を反省し、考慮し、主張し、改善すべき幾多の實際問題を持つてゐるのであります。

故にそれらの點に關する二三の事柄について、小學校と幼稚園の連絡といふ意味をも含めて、いさゝか申し述べて見たいと思ひます。

一、小學校低學年の新教育

私も卒先して、小學校低學年（一、二年）の教育法の革新を實驗し、大いに之を全國の教育界に提唱し指示してゐるのであります。が、全體的に見て、近年は小學校もこの低學年教育法の改善といふことが、最も眞剣に考へられるやうになつて來てゐるのであります。然らばどういふ目指して改善しやうとするのかといひますと、低學年兒童の身體及び心意によく合ひ、兒童の活動——生活の自然に合致する指導から、合自然的に育て上げなければならぬ、即ち生活を指導する教育法を執らなければいけないといふのであります。旺盛なる兒童の活動——生活の中で獲得した知識や技能であつてこそはじめてその兒童の身についたものになる、即ちその子の生活のため、成長のための眞の糧となるものであるといふことを次第に覺つて來たのです。

そこで改善された低學年教育法では、家庭の延長としての低學年教育法とか、幼稚園の延長としての低學年教育法といふことになつて來てゐるのです。これは非常に眞面目な教育態度であると私は考へます。子供の身體、心意、生活の發達の自然に合致する教育法を執つて以つて「人」に育て上げて行かうとするのです。で、入學早々から色々な知識を教へ込

んで、子供をびくつかせたり、偉がらせたりするやうな不自然な舊式教育法な捨て、幼稚園や家庭風の指導におりたわけです。

かうなつて來た指導精神の根本には、「神は接木や接芽をなし給ふことはない」し、「神はいと小さき不完全な物をも其の中にある自己發展の法則によつて、一步一步と間斷なく發達させ給ふ」のであるといふこと、或は「萬物は各々其の本質を發揮すべき運命を持つて居る。之を發揮するのが萬物の天職である。換言すれば其の有限なる存在の中に神なる統一者を現はすことが萬物の運命であり、またその天職である」といふやうな大教育フレーベルの思想も多分に存するのであります。

小學校低學年の教育が、かくの如く漸次兒童本位になり、幼稚園や家庭の保育に接近して行きつゝあることは、幼稚園保育があくまでもその使命に安住して、以つて保育の實を達成せられる上に非常によいことではないかと考へるのであります。

卒先實施してゐるわが女高師附屬小學校の低學年教育法も、次の如き要領を以つて、天下の小學校に提唱大いにこれ努めてゐるわけでありませう。

低學年教育ハ低學兒童ノ特殊性ニ立脚シテ其ノ生活ヲ指導シ、尊重シ、社會ヲ陶冶シテ、獨立ノ個人並ニ社會人タルノ素地ヲ養フヲ以テ要旨トス

生活ノ指導ハ合自然ノ方法ニヨリ、直觀ニ發スル一系列ノ活動ヲ輔導シ、以テ生活ノ總合的全體教育ヲ行フ。其ノ形式ハ遊戲及ヒ作業トシ、作業題材ハ兒童ノ生活環境内ニ於ケル自然ノ事物現象、文化的社會的ノ事物現象ヨリ採ル。遊戲題材ハ兒童ノ自發活動ヲ尊重シ、身心ノ發達ニ適合セシム。

全體教育ノ指導課題ハ次ノ如シ

(一) 直観 (二) 説話 (三) 作業 (四) 發表 (五) 遊戲

學級ハ之ヲ兒童ノ共働社會ヲラシメ、教室ハ之ヲ兒童ノ生活場所タルニ適セシム。

教師ハ始業ヨリ終業ニ至ルマテ絶エス兒童ト共ニ生活シ、共働ス。

學校生活ノ時間的區分ハ兒童ノ活動狀態ヲ考慮シ、其ノリズムニ適合セシム。

各教科ハ特ニ教科トシテハ取扱ハス。

二、幼稚園の立場と家庭及び小學校

小學校が舊式な一齊教授の自己便宜から、園兒に文字を覚えさせて貰つては困ると苦情を言ふとか。これは私の考へるに小學校の大なる心得違ひであります。お勘定や數の觀念、言葉や事物觀念については何等苦情を申さず、特に文字にだけに苦情を言ふのはわからない話です。尤も、幼稚園を小學校入學の準備場所の如くにし、力めて色々な知識を注入強制するとか、保育料徴收の手前、何か教へ込まなければ家庭が心もとないであらう、などゝ心得違ひして、まるで舊式小學校の如くに幼兒を机腰掛に縛りつけ勝ちな幼稚園があるとすれば、それは小學校の苦情どころか幼稚園そのものゝ保育がなつてゐないといふことになりませう。

しかし、今日の文化の進んだ家庭や都會に生活する幼兒は、片假名文字ぐらひは入學以前に生活として覚えて了ふのであります。幼兒の能力としても、言葉及文字の觀念は數觀念よりはずつと早く持ち得るのであります。生活の發達は全く環境に即する、言葉や文字は生活に即して覚え込まれる。で、文字を覚えるか覚えないかといふことは大部分その環境の

如何にあるのでありますから、能力としては殆んど問題がないのです。家庭で幼児を育て、見てさうです。一年生に入つて始めて、イロハのイから教へ込むべきだなど、考へてゐるのは、全く子供の能力の發達を識らない舊式な考へなのであります。

また、小學校としては、幼稚園をふんだ子供とふまない子供とを一緒に取扱ふのは困る、といふかも知れません。しかし、私共は殆んど困つてゐないので。なぜなら、子供の眞の持ち前を發揮させて、その子供を活かすと共に他の子供に作用させて、クラスの子供の社會を高めて行くやうな教育法を執るからであります。

家庭によつては、未だに、幼稚園に入れた方がよいか入れない方が子供の爲かについて、疑ひ迷つてゐる向があります。「生意氣になり易い」とか、「子供が伸びく／＼育たぬ」とかと心配されるらしい。いたづら盛り、ぢつとしてゐるのが何より苦しい時代の幼児ですから、何かを覺えさせようなど、は餘り考へずに、大氣の中で心ゆくばかり毎日遊ばせ、叫ばせ、踊らせ、跳ねさせるのが本當ではないでせうか。教へるために仕組まれた遊戯といふものは、なか／＼子供の眞の活動にはなり得ないものです。子供同志の發案や思ひつきで活動する遊戯を主體にして、その中に入つて輔導して見守るといふ態度が本當ではないかと考へます。私どもの低學年の遊戯生活の指導も、大體さういふ態度を執つて居ります。何事も場所と物と機會に適應して活動するのが幼児、兒童の特殊性です。して見れば場所と物と機會を恵むこと、即ち環境の經營といふことが何より先決的な指導ではないか、と私は考へるのであります。

故に小學校の低學年としては、自發活動性に富んだ子供、創意に富んだ子供、仲間とよく遊べる子供が望ましいわけです。ヤンチャでも活動性に富んで、よく遊べる子供ほど、私は指導して仕甲斐があるので。

三、子供は足から

心と頭と手を一致させる教育法を、大教育者ベスタロツチが強く主張されましたが、幼児の保育については、私は心よりも、頭よりも、手よりも、先づ足を丈夫にすべきではないかと考へます。子供の足の發達をはからずには、殆んど身體の發育が望めません。なんで心と頭と手の發達をや、です。

足、足、足の發達が第一ではないでせうか。特に都會地の幼児には、どの點から考へて觀ましてもこの「先づ足！」でなくてはならないと信じます。この足を丈夫にすることは、心と頭と手とからだとをすく〜と伸び茂らせる土臺であると信ずるのです、文明都會の生活は人間に足を忘れさせ、足の發達を奪ひました。土臺の弱い上に築く心と頭と手、それは見込みがありません。 「可愛い兒に旅をさせる」は心の鍛錬、「弱い兒に旅をさせる」は健康の鍵だと思ひます。

足、足、足、足を丈夫にさせるやうな育児の着眼、私はあくまでこれを望んで止まないのです。私の恩師である某中學校長が、過日私に申されますには、「東京の幼稚園や小學校では、教育上、「なま土踏み場所」といふやうな特殊の設備が是非要るだらう」

とのことでした。そして

「子供がなま土も踏まないで、それでよく成長するかネ？」

との反問でした。誠にうがつた着眼であると思つた次第です。

「心身の健全なる發達は足から」といふ私の持論は、草露を踏み、なま土を踏んで足の發達が望ましいのですが、とにかく、幼児の保育上、特に健康の増進上、室内での心と頭と手の作業にも増して、一段と子供の足から丈夫にしてやるやうな方法が執られなければならないと考へるのであります。